

語り継ぐ平和への思い

残された家族の思い

総務課総務法制係 ☎ 0824・73・1123

終戦を迎えて79年が経過し、来年には終戦から80年を迎えます。先の戦争では、多くの人が傷つき、そして多くの尊い命が失われました。その時に負った傷で、今もなお苦しんでいる人がいます。家族を亡くした遺族の悔しさ、悲しさも決して消えることはありません。今回は、その遺族の思いをお聞きしました。皆さんも命の尊さ・平和の大切さについて考えてみましょう。

父との別れ

山 本喜一さんは、昭和7年に父・四郎さん、母・ヨシコさんの長男として、比婆郡高村（現高町）で生まれ、四郎さんが出征するまでは、祖父と2歳年下の妹、10歳年下の弟との6人家族でした。四郎さんは大工で、当時は、四郎さんが大工仕事で稼いだお金と農業で一家は生活をしていました。

昭和16年の暮れ頃、四郎さんのもとに、当時「赤紙」といわれていた、召集令状が届けられました。9歳だった喜一さんには、赤紙が届くことが、どういうことであるかわ

く分からなかったそうです。昭和17年10月、四郎さんは西部第十部隊として臨時招集され、広島市へ赴くこととなりました。

出征前、高駅近くの神社で、出征兵士のための祈願祭が行われました。当時の村長から「山本四郎君が国のために出ていきます。バンザーイ！」という三唱があり、四郎さんは「元気で出てまいります」と応え、駅に向かったそうです。

喜一さんは、四郎さんを見送るため、一緒に駅に向かいました。駅には、喜一さんら家族のほか、村長や小学生50人、婦人会の人、親戚な

ど、多くの人が四郎さんの見送りに来ていたそうです。しばらくすると、ホームに

汽車が入ってきました。汽車が止まると同時に、四郎さんは「皆さん。ありがとうございました。よろしく後をお願いいたします。バンザーイ！」と言って、汽車に乗り込んだそうです。

汽車が出る前、四郎さんは「喜一よ、お前は長男だから、お母さんの面倒を頼む。兄弟で仲良くして、大きくなれよ」と言って、喜一さんの頭をなでてくれたそうです。現在、91歳とられた喜一さんが「あのお父さんの姿はいまだに忘れることができない」

「お国のために尽くすんだから元気で帰ってくるよ。また一緒に生活できるけえのう」というお父さんの声が頭に残っている。やはり寂しかった」と涙ながらに話をしてくださいました。

まるで四郎さんとの別れを告げるかのように「ボー！」と汽笛が鳴り「バンザーイ！バンザーイ！」という見送りの声の中、汽車はホームを出ていきました。四郎さんは、多くの人に寄せ書きをもらった



▲当時のビルマ前線の輸送部隊の写真(山本さんより提供)

問団の一員として、ミャンマーを訪れました。

訪問団は、ビルマ戦線で命を落とした人のゆかりの地で、個人慰霊祭を行っており、喜一さんは、ミャンマーのほぼ中心部に位置するマンダレー市のサガイン・ヒルという小高い丘の上で、四郎さんの慰霊祭を行いました。

慰霊祭では、喜一さんを含む23人の遺児が、花や酒、果物などを供えた後、順番に焼香をあげました。喜一さんは、順番が来ると「お父さん！迎えに来たよ！喜一ですよ！一緒に帰りましょう！」と思わず叫んだ。何も返事はないが、魂だけは背負って帰った気がする」と四郎さんのことを思いながら、話してくださいました。

私たちができること

今回の取材の中で、喜一さんは「私一人が遺族となつたわけではない。私よりも悲しまれている人は数えきれないほどいる。戦争は二度とあってはならない」と、平和への思いを語ってくださいました。「戦争は悲惨なものである」

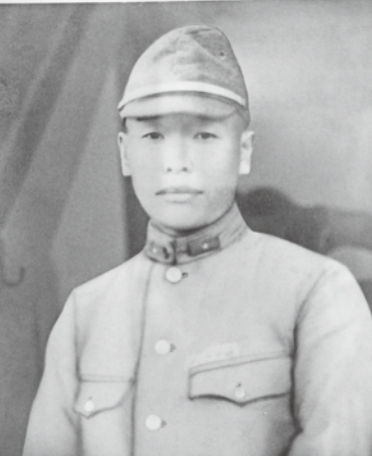
ということは、誰もが知っていることですが、具体的にどう悲惨なのかは、当時を経験している人に話を伺ったり、実際に現地へ行って学んだりしないと、なかなか真相を知ることができないのではないのでしょうか。

しかし、戦後79年が経過した現在、戦争を経験した人は高齢化し、当時の様子を直接伺うことが難しくなっています。

戦争を経験し、傷を負った人、兵士として戦場へ向かった人、今回お話を伺った山本喜一さんのように、家族を亡くした人たちの悔しい思いや悲しい思い、戦後の混乱期の中の苦勞を学び、二度と同じ過ちを繰り返さないよう、戦争の記憶と平和への思いを受け継いでいくことが大切です。

これから戦後90年、100年と月日が経過していく中で、戦争の記憶が受け継がれることなく、人々に忘れ去られていくことがあってはなりません。

この記憶を風化させないためにも、私たちは平和について学び、考え、平和の尊さを後世へ語り継いでいくことが大切なのではないでしょうか。



入隊した当時の四郎さん

明治42年 9月15日	誕生
昭和7年 11月1日	長男・喜一さん誕生
昭和17年 10月11日	広島西部第十部隊に応召
昭和18年 9月11日	ビルマ第十五軍戦闘序列に編入
昭和19年 5月	インパール作戦に参加
昭和19年 8月7日	戦病死

敵対していた中国・国民党政府への連合軍による援助を遮断することなどを目的に開始されましたが、日本軍の前線への補給が続かず、失敗に終わり、撤退中、飢えと病気で多くの兵士が苦しみ、戦死・戦病死したそうです。四郎さんも米粒一つ食べられず、カエルでも、ヘビでも食べられそうなものは何でも食べて命をつないでいましたが、「アメルバ赤痢」に感染し、昭和

四郎さんの生い立ち

19年8月7日、34歳の若さで亡くなりました。四郎さんは、立ち上がることもできないほど衰弱する中「もう一度祖国の土を踏みたい、連れて帰ってくださいい」家では年寄りや妻子が待っている。もう一度会いたい」と言いながら亡くなられた」と、喜一さんは後に、復員した四郎さんの戦友に聞いたそうです。

戦時中、戦死・戦病死を伝える死亡告知書は、役場の職員が遺族へ届けていました。「役場の職員が家を訪ねてくるとすぐに、お母さんの顔色が変わったんです」と喜一さん。告知書の内容を見てはいませんが、ヨシコさんの様子から、子どもながらに四郎さんの死を悟ったそうです。

喜一さんは、叔父と2人で、広島市内の被服廠へ四郎さんの遺骨を引き取りに行きました。僧侶から木箱が渡されたので、首に下げて家に持ち帰り、ヨシコさんに手渡ししました。「ちよつと悪いけど開けてみよう」と、木箱を開けてみたそうですが、遺骨は入っておらず、四郎さんの名前の書いてある紙だけが入っていたそうです。

父のゆかりの地で

喜 一さんは、平成4年、ミャンマー慰霊友好親善訪